

## こんなものを読んできた(35)

これはゆとり世代ですか？～蓑輪 諒「殿さま狸」～

校長・鈴木 健

前回の「うつろ屋軍師」に続き同じ作者の別の歴史小説です。

今回の作品の主人公は、蜂須賀（はちすか）家政という人です。家政の父親は蜂須賀小六正勝といい、豊臣秀吉が身分が低く無名だったところからの盟友で、知略・謀略にだけた武将です。その息子の家政も秀吉の親衛隊、黄母衣（きほろ）衆の一員でした。

家政は槍をふるっての武勇も父親譲りの知略もあり、秀吉の毛利氏攻略や本能寺の変の後の「中国大返し」などで功績を上げていきます。そして秀吉が天下を手中に収めた後は、阿波（今の徳島県）を治める大名となります。

順調な人生を送っているように見える家政ですが、家政自身は自分のあり方に不満と疑問を抱えていました。黄母衣衆になったのも阿波の領主になったのも、全て父親のおかげであり、自分は何も成し遂げていないのではないかと。その一方で、家政は真面目で優秀な領主でもあり、阿波の人々が平和に豊かに暮らせるよう一生懸命働きます…。

蓑輪諒の作品を2作続けて読んで感じたのですが、「うつろ屋軍師」の江口三右衛門も「殿さま狸」の蜂須賀家政も、人物造形がとても現代的です。江口三右衛門は豊臣秀吉すら驚かせるほどの戦略眼の持ち主で、秀吉の下で力をふるうチャンスもあったのに、丹羽家の家臣として主家を守る道を選びます。蜂須賀家政も、秀吉側近時代の仲間、石田三成が豊臣家を守るために強大な徳川家康に立ち向かおうとする姿に敬意と共感を覚えるのですが、自分自身は家臣や領民を守るために徳川側を選びます。二人とも、あまり背伸びや無理をしません。作者の蓑輪諒は1987年生まれで、「ゆとり世代」の最初の方の人ですから、これは「ゆとり世代」を反映した人物造形なのかもしれません。

戦国時代の武将ということこれまで人気があったのは、天下を目指して突き進んだ織田信長や豊臣秀吉、武田信玄、豊臣家に殉じた石田三成や真田昌幸・信繁親子、ちょっと外れたところで傾奇者の前田慶次など、突っ張った生き方をした人たちでした。

「ゆとり」の生き方と「突っ張った」生き方のどちらがいいということはないと思います。みんながみんな大義や信念を掲げて突っ走る熱い人ばかりでは大変です。バランスを取ってほどほどに生きる人たちの御陰で世の中はうまく回っているのでしょうか。

ふと思い出しましたが、私が小学生のころ家族旅行で行った熱海の旅館の隣に、まるでヨーロッパの貴族の城館のような立派な屋敷がありました。旅館の人に聞いたところ「蜂須賀家の別荘」という話でした。蜂須賀家は戦国時代を生き延び、江戸時代も阿波の領地を維持し、明治になってからも侯爵家でした。私が見た洋館は、家や領地の安寧を図り生き延びることに徹した成果だったのかもしれない。だとすれば、それはそれで立派なものだったと思います。